

《シリーズ ケアをひらく》 『発達障害当事者研究 ゆっくり丁寧につなりたい』

医療者の「障害」理解を新たな境地へ誘う新時代の著作

著：綾屋紗月／熊谷晋一郎／定価：2,100 円（本体 2,000 円＋税 5%）
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



●発達障害こそ“連続体”である

わが国ではLD, ADHD, 高機能自閉症, アスペルガー症候群などを法律的に、身体障害、知的障害と区別して「発達障害」とひとまとめにして呼ぶ。本書の著者綾屋紗月さんは2児の母であり、後年、「アスペルガー症候群」と診断され、「いたい私は何者だろう……。長年の問いに対し、『当事者研究』という時代の波が、私に千載一遇のチャンスをおたえてくれた」と語る。

著者の長年の実体験を、単に「従来の」自閉症概念になぞらえ重ねていくのではなく、みずみずしく、ダイナミックに「発達障害」という大きな枠の中でとらえなおそうとしている。かねがね私自身、臨床体験の中で「発達障害こそスペクトラム（連続体）である」という想いを強く抱いてきた。

著者の「なぜ、おなかですくのか」から、日常の「フリーズ（体の動きの停止）」や「パニック」などの解釈、さらには「頭の中で創り出す世界のなかでなら、私は、だれとも対話できる」「私には何か欠陥がある。どうやら私は、“大人”になれない人間なのかもしれない。いたい私は何者なのだろう……。』という展開に、思わず惹かれていく。

これこそアスペルガー症候群の診断定義のなかにある「イマジネーションの欠如」と実際の臨床像との間で、今一つとらえきれぬもどかしさを感じていた私を深くうなずかせるものであった。

●『レタスが涼しい』をどう取るか

さらに世間の人がよく使う「ふつう」という表現に、「障害も個性」という立場をとる私は違和感をつねに持っていた。彼女が語る「普通のフリ＝社交」に、鋭い洞察力とLDなどにも共通する障害理解の広がりを見た。一つの例をあげよう。『レタスが涼しい』、この感覚を変わっているとみるか、伝わる表現、ユニークな比喩ととらえるか。「発達障害」は時代を超えて、私たちに新しい世界を切り拓く鍵を提供しているのかもしれない。本書は発声障害やLDなどの識字障害にもふれる。また、共著者は脳性まひ当事者で小児科医である熊谷晋一郎さんで、彼との共同研究の成果という側面も持つ。研究と銘打つだけに一般の読み物としてはややくどさを感じる部分もないわけではないが、切り口は実に深く、新鮮である。

かつて、自閉症の当事者の書いた本として、『自閉症だったわたしへ』（ドナ・ウィリアムズ著、河野真理子訳、新潮社）、『我、自閉症に生まれて』（テンプル・グランディン&マーガレット・M・スカリアノ著、カニングハム久子訳、学習研究社）が、私たちに大きな衝撃を与えた。本書は、自閉症理解の、そして「発達障害」理解の著作として、私たちに限りない興味と関心を湧き起こし、特にこうした方々と直接関わる関係者を新たな境地へと誘うものである。